

令和六年新年  
掘り出された干支  
-辰-

# 珉平焼

## 龍文小判皿・製品型・元型

珉平焼窯跡(南あわじ市)/特別史跡姫路城跡(姫路市)

令和六年は辰年です。龍(竜)は干支のなかで唯一空想上の動物があてられていますが、日本でも古くは弥生時代の絵画表現に登場するなど、2000年以上にわたって親しまれてきました。雨や水を司る龍は、中国では皇帝のシンボルでもあり、古くから縁起の良い動物とされています。

今回ご紹介する龍が描かれた縁起物は、濃厚な緑や黄色の釉薬で彩られた珉平焼の小皿です。珉平焼は江戸時代後期の文政年間(1818~30)に賀集珉平が現在の南あわじ市で創始したやきもので、その技術は淡陶社(明治16年創立、後の淡陶株式会社)に受け継がれ、明治から大正にかけて陶器生産を拡大、国内にとどまらず海外へも輸出されました。

窯跡の発掘調査では、粘土を押し当てて製品を作るための「型」も数多く出土しており、龍が描かれたものは約1,000点にのぼります。なかでも小判形の皿はいくつかバリエーションがあり、展示しているタイプの型は約350点を数えます。この「型」を作るための「元型」も見つかっており、大量生産のための工夫と需要の高さがうかがえます。これらの型には製作された年号が記されているものがあり、窯跡の出土資料からは明治27~42年の15年間、デザインを変えることなく生産されたことがわかります。

また、姫路城の武家屋敷跡から同様の製品が出土しており、当地が日陸軍の駐屯地として整備され始める明治8年以前のにさかのぼることから、この皿は、淡陶社創立以前から続くロングセラー商品であったことがわかります。 (学芸課 藤原 恋史)

